

令和 2 年 4 月 20 日現在

機関番号：32687

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18172

研究課題名（和文）自閉症スペクトラム障害児における他者の視線理解による社会的相互作用の促進

研究課題名（英文）Promotion of social interaction through understanding of others gaze by children with autism spectrum disorders

研究代表者

渡邊 孝継 (Watanabe, Takatsugu)

立正大学・社会福祉学部・助教

研究者番号：00769466

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本報告書では、自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）児が他者の視線方向と表情を読み取ることが可能になるプログラムの開発の結果を検討している。開発を行ったプログラムの効果は、ASD児の実験場面における行動変容、家庭や教育場面における社会的相互作用の変化、幸福感・満足感の変化の3点であった。

今後は、ASD児のQOLを促進する要因を特定すること、家庭や教育場面において実施可能である簡便なコミュニケーション促進プログラムの開発が必要であることと結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、他者の視線方向や表情を読み取ることが可能になるプログラムを開発できたこと、そして、その結果として、ASD児とその保護者の幸福感・満足感に変化が生じることを明らかにしたことが学術的意義である。そして、本研究で開発した他者の視線方向や表情を読み取ることが可能になるプログラムをASD児に実施することで、ASD児が家庭や保育・教育場面において、他者との社会的相互作用円滑化されることが社会的意義である。

本研究は、ASD児にただプログラムを実施して行動変容を求めるのではなく、ASD児や保護者の幸福感・満足感も検討しなければならないことを指摘するものである。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the results of a program developed to facilitate children with Autism Spectrum Disorder (ASD) comprehending the line of sight and facial expressions of others. The program had three effects; (1) behavior modification of children with ASD during the experiment, (2) changes in the social interactions of children with ASD in the home and in educational environments, and (3) changes in the happiness and satisfaction of children with ASD. It was concluded that in the future, (1) the identification of factors promoting QOL in children with ASD, and (2) the development of a program to promote simple communication that can be implemented in the home and in educational environments are necessary.

研究分野：応用行動分析

キーワード：自閉症スペクトラム障害児 社会的相互作用 視線 表情 QOL コミュニケーション

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初、自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）児の養育者や保育士・教師への ASD 児に対する支援プログラムの提供は十分ではなかった。ASD 児を抱える家庭や保育・実践現場は、特に ASD 児へのコミュニケーション支援技法を求めていた。ASD 児は他者とのコミュニケーションが不成立に陥りやすいためである。他者とのコミュニケーションが不成立に終わると、他者とのコミュニケーションを回避するようになり、不登校や引きこもりになる場合がある。そのため、ASD 児のコミュニケーション支援技法を開発し、ASD 児の不登校や引きこもりを防ぐことは喫緊の課題であった。その際、ASD 児のコミュニケーション支援技法を開発するにあたり、“ASD 児がコミュニケーションを円滑に進められない原因の中に、他者の表情への注目の困難や他者の視線の方向や機能の読み取りの脆弱性が想定された。ASD 児が他者とのコミュニケーションを成立させ、関わり自体を楽しむことが可能になるためにも、ASD 児が他者の表情への注目や他者の視線の方向や機能の読み取りが可能になる必要があると考えられた。

さらに、ASD 児は、コミュニケーション能力を学習により獲得した場面とスキルを発揮する場面が異なると、身につけた力が発揮できないという「般化」の課題があった。他者の心境や他者が置かれている状況が理解できるようになったとしても、適切にスキルを発揮できなければ他者とのコミュニケーションを回避する状態は継続してしまう。そのため、家庭や保育・教育場面で学習したスキルを発揮できているかということもあわせて検証する必要があると考えられた。また、その支援の有効性は、当然当事者の利益という視点から分析すべきであると考えられた。

2. 研究の目的

以上のことから、ASD 児が他者の表情への注目や視線方向の理解が困難であるためコミュニケーションが未成立に終わってしまいやすいことや、学習したスキルが般化しにくいという課題、本研究が ASD 児の利益につながるかの確認が必要であることが示唆された。これらのことを踏まえ、本研究では、①ASD 児の社会的相互作用促進のために、幼児期・児童期における他者への表情や視線方向の理解を促進するプログラムを開発すること、プログラムを実施した後、②ASD 児自身の幸福感・満足感の変化について、評定尺度を用いて明らかにすること、③②の ASD 児自身の幸福感・満足感の変化をより肯定的なものとするために、対人交渉のレパトリーを拡大することの3点を目的とした。なお、当初は2年間で本研究を実施する計画であった。しかし、計画していたよりも多くの研究を実施できたため、補助事業期間延長の承認を受けた上、3年間で研究を実施した。

3. 研究の方法

(1) 研究の計画

本研究では、第1研究から第3研究までの3つの下位研究を計画した。第1研究は、①ASD 児が他者の視線方向や表情を読み取ることが可能になるプログラムの開発であった。第2研究は、②本研究を実施した結果、ASD 児自身とその保護者の幸福感・満足感に変化したか否かについて分析を行った。第3研究は、③第2研究で検証した ASD 児自身とその保護者の幸福感・満足感の変化をより肯定的なものとするために、対人交渉レパトリーを拡大する研究を行った。

(2) 第1研究の概要

第1研究は、「ASD 児における社会的相互作用の促進に関する研究」であった。第1研究では、ASD 児が他者の視線方向や表情を読み取ることが可能になるプログラムの開発を目的とした。この目的を達成するために、ある大学の臨床発達セッションに参加している小学4年生の女児1名（以下、対象児）を対象に研究を実施した。対象児は医療機関で ASD と診断されていた。対象児は対人コミュニケーションや自己制御が主訴とされていた。大学の実験室において、自然な文脈で新たな社会的技能を指導する Leaf, McEachin, & Taubman (2012) の“Teaching Interactions (TIs)”に準拠して実施し、類似した場면을複数体験する指導を行った。

(3) 第2研究の概要

第2研究は、「ASD 児の社会的コミュニケーションの促進による QOL の変化の検討」であった。第2研究では、第1研究を実施した結果、ASD 児自身の幸福感・満足感に変化したか否かについて検討することを目的とした。この目的を達成するために、第1研究における対象児とその保護者を対象として大学の面接室で研究を実施した。評価には、児童の QOL を測定する尺度の日本語版の Kid-KINDLR (柴田・根本・松寄・田中・川口・神田・古荘・奥山・飯倉, 2003) を使用した。Kid-Kid-KINDLR は、身体的健康、情動的 well-being、自尊感情、家族、友達、学校生活の6領域について各4項目ずつ合計24項目から構成された。第2研究では、第1研究実施前後における対象児と保護者の得点の差を分析した。

(4) 第3研究の概要

第3研究は、「ASD 児の他者の視線方向や表情、言語行動を手がかりとした分配行動に関する研究」であった。第3研究では、対人葛藤場面における対人交渉のレパトリー拡大を目的とした。この目的を達成するために、第1研究、第2研究の対象児を対象として研究を実施した。対象児は、大学の実験場面で、対人葛藤場面を解決する分配行動を可能な限り多く選択、あるいは

創造することが求められた。対象児の対人葛藤場面を解決できる分配行動の種類を増やすために、モデル提示と対象児の回答をフィードバックする介入を実施した。

4. 研究成果

第1研究より、実験場面において ASD 児の他者の視線や表情を手がかりとした社会的相互作用の促進が確認された。このことから、ASD 児が他者の視線方向や表情を読み取ることが可能になるプログラムの開発することができた。②第2研究より、Kid-KINDL[®] 得点が ASD 児と保護者の双方とも変化した。得点が上昇した項目と下降した項目があり、ASD 児と保護者の得点の変化には差が見られた。このことから、ASD 児の他者の視線や表情を手がかりとした社会的相互作用が促進されても、一概に「QOL が向上する」とは言い切れないことが指摘された。③第3研究より、ASD 児の対人葛藤場面における対人交渉のレパートリーは増加させることができることが明らかになった。対人交渉のレパートリーが1つではなく複数あれば、単一の方法に固執し繰り返すことを防ぐことができる。さらに、状況に応じた対人交渉が可能となれば、コミュニケーションが成立しやすくなり、ASD 児自身とその保護者の幸福感・満足が高まると考えられた。

以上のことから、①他者の視線方向や表情を読み取ることが可能になるプログラムの開発を達成したこと、②幸福感・満足感において変化が見られること、③対人葛藤場面における対人交渉のレパートリーは拡大可能であることが成果として報告された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡邊 孝継	4. 巻 23
2. 論文標題 神経発達症児への支援プログラムに参加する大学生を対象としたスタッフトレーニングの効果 – 習得される応用行動分析に関する知識の分析 –	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間関係学研究	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊孝継・山口暁・豊田真季・竹森亜美・中内麻美・大石幸二	4. 巻 50
2. 論文標題 自閉スペクトラム症児の対人葛藤場面における互恵的な分配行動の獲得 – 他者との円滑な対人交渉を目指して –	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語文化学会論集	6. 最初と最後の頁 139-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Watanabe Takatsugu	4. 巻 3
2. 論文標題 Attention getting Behavior Acquisition from Others' Speech in children with Autism Spectrum Disorders	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Academic Pilgrimage to Sustainable Social Development	6. 最初と最後の頁 153-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊孝継
2. 発表標題 自閉症スペクトラム障害児における 社会的コミュニケーションの促進に関する研究 – 他者の視線方向、言語反応、表情を手がかりとした行動の選択
3. 学会等名 日本人間関係学会第25回大会、千葉商科大学（千葉県、市川市）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊 孝継
2. 発表標題 自閉症スペクトラム障害児における 社会的コミュニケーションの促進に関する研究(2) -Kid-KINDLRを用いたQOLの推移の検討-
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会, 大阪国際会議場(大阪府, 大阪市)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊孝継・豊田真季・竹森亜美・大石幸二
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児の分配行動に関する研究, 対人葛藤場面における分配行動の種類増加
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会, 広島大学(広島県, 東広島市)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----